
ネームレス 第一章【記憶の放浪者 -Memories Wanderer-】

T・F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネイムレス 第一章【記憶の放浪者 - Memories Wanderer -】

【Nコード】

N3165Z

【作者名】

T・F

【あらすじ】

記憶を求める少年の物語。
彼を支えるのは常識だけ。

しかしそれさえも、彼の目の前に訪れた現実は奪い去っていく。
荒唐無稽で途方途轍もない世界の裏側に身を投じた少年は、記憶と世界の未来を巡って走り出す。

「プロローグ」(前書き)

T・Fと申します。

当サイトへの投稿は初となります。

一生懸命書きました。

せっかく無料ですので、思う存分お読み頂ければ幸いです。
お待ちしております。

忌憚のないご意見感想をお待ちしております。

「プロローグ」

二〇一二年 某日。

通常、軍事基地に置かれるレーダーには、電磁波が用いられる。レーダーから発された電磁波が対象物にぶつかり、跳ね返ってきた反射波を計測することにより、対象物との相対距離や正確な位置・方向を算出するのである。

しかし昨今、そういった通常のレーダー・システムでは感知されにくい兵器が、先進国を中心に次々と開発されるようになった。

ステルス 隠密性を備えた兵器だ。

それは主に戦闘機や戦艦に施される装備で、レーダー波を大きく屈折させて反射波を正方向へ返さないようにしたり、機体の装甲にレーダー波を吸収させる性質を備えた素材を用いたりするのである。ただ、レーダーも馬鹿ではないので、いくらステルス兵装されていても、距離が縮めば縮むほど発見しやすくなる。また目視されれば、ステルスはナンセンスな道具に成り下がる。

最近ではレーダーを送信機と受信機に分けて設置し、曲げられたレーダー波をキャッチするような高度な物なども考案・開発・応用され、進歩を続けている。

しかし、太平洋を越えて浦賀水道に差しかかったとある未確認飛行物体は、現代技術の粋を極めても太刀打ちできないほどの、完全と呼ぶに相応しい隠密性を獲得していた。

透過して目視できず、レーダー波を吸収し、かつゆるく屈折・歪曲させるので感知されず、自身の熱量を外気と同調させて熱量測定器や暗視装置サーモグラフィ ナイトビジョンによる発見を回避している。

さらにその未確認飛行物体は、ほぼ無音で悠々と飛行していたのだった。

まさにUFOにも匹敵すると思われる、恐るべき性能を有した飛

行物体だ。

日本の海自及び米軍の、二つの横須賀基地の眼前を難なくクリアしたそれは、東京湾上空を突き進み、深夜の都心へと向かっていた。

「っていつかぁー、今回の作戦^{コレ}、完全に拉致ですよねー」

未確認飛行物体：もとい、ある組織の所有するハイテク輸送機

DEM 3 2 の中で、女が仰向けに寝転がりながら訊いた。彼女は機内右側の縦座席^{ロングシート}を全て占拠して、他三名の乗組員を向かいの席に追いやっている。

今年で二十一歳になる女のだらしない格好と物言いに、丸坊主の巨漢は溜め息をついた。

「何度も言わせるな、エリ。あくまで保護だ、保護……」

エリというポニーテールのよく似合う美女は、それでも食ってかかるように言った。

「いやいや、コレ絶対拉致ですよ。だって寝込み襲うんでしょ？」

しかも対象ってまだ十七歳の子供

「言つな。気が重いのはお前だけではない。しかし、上からの命令だ。従うほかあるまい」

「命令って……。またあのバグって人からのタレコミですよ。信用できるんですか？」

「できると上が判断したんだろう。お前の勘繰りも分からんでもないが、だからこそ我々が差し向けられている。いかなる状況にも対応できる、我々がな」

「へっ。敵の偽情報^{フリップ}の可能性が消えねえんじゃ、体のいい当て馬扱いじゃねえかよ。いくら俺達でも、こんな人口密集地でドンパチだ

なんて面倒は御免だぜ」

エリではなく、若い男が口を挟んできた。

銀髪のウルフカットの下で、鋭い三白眼を光らせている。彼は巨漢に続けて言った。

「まあ、それ抜きにしてもだ……。もしも対象がノーマルだったら、責任取れんだろうな？」

「それは……、その時だ」

苦い顔をする巨漢に、銀髪男は立ち上がって声を荒げた。

「一人の人生懸かってんだぞ、こんなことで犠牲者出してたら組織の名折れだろが!!」

「……名無しの我々に折れるものがあるか。少し頭を冷やせ、ケン」

銀髪男 ケンは、舌打ちして機内の壁を蹴った。

その様子にはエリは、「ワンちゃん怒られてやんの。カツ」わるう
「」

「ちっ……！ 黙れよ、プレデター女」

「ああん！？ 今なんつった!」

「やめんかっ!!」

巨漢の雷声が、わずかに機体を揺らした。

「貴様らはどうしてこう、いつもいつも……!!」

『酒顛隊長さん、アンタの声はデカすぎる。気を付けてくれないと墜ちちまうぞ』

「ぬっ……!!」

この輸送機を操縦する機長からの、機内アナウンスだった。エリがそれを聞いてほくそ笑んでいる。

そんな彼女の性悪な様子にケンが悪態をついて、また騒がしくなった。

機長は苦労の絶えない巨漢　酒顛に同情しつつ、「三十秒で到着する。準備は良いか」

『良いと言えば良いし、悪いと言えば…!』

酒顛はタッチパネルに軽く触れた後、横にある液晶ディスプレイに向かって喋った。彼の指紋を認識し、操縦室のディスプレイ上に彼の名前と映像が表示される仕組みだ。

酒顛の困り顔に、機長達は微笑を浮かべていた。

しかし次の瞬間、そのつるりとした頭に青筋が立ったので息を呑んだ。

『うるさいぞっ!』

割れた声が、ビリビリとヘッドフォンを震わせる。

機長は咄嗟にそれを外していたのだが、どうやら間に合わなかったようだ。耳を押さえ、呻くように、「ユ、ユ、ユ、ハブ・コントロール」…「アイ・ハブ・コントロール」副機長は苦笑いを浮かべて、操縦桿を譲り受けた。

『残り二十秒です。ハッチ、開きます』

副機長の礼儀の通った声が響いて、機内後部にあるパイロットランプが緑から赤へと変わり、点滅した。

『風速、高度、共によろし。降下ルート上に障害物見当たらず。オ
ールクリアー』

それを確認するよりも早く、戦闘服にゴーグルをかけた酒顛達
四人の隊員は、ランプ下の大きな後部ハッチに並んで待機してい
た。

「そもそもアンタ、めんどくさいのよ!」

エリとケンの口喧嘩は、ますますヒートアップしていた。ハッチ
が開いて滑り込んだ突風に機内がかき回されても、彼らは互いを指
差して文句を言い合っているのだった。

「何で一々、アンタに体臭断らないといけないわけ!？」

「仕方ねえだろうがっ、俺だって好きでこんな鼻持って産まれたわ
けじゃねえんだ!」

「そんなの分かってるわよっ! レディーに対してのマナーとかエ
チケツトとかの問題を言ってるのよ! アンタはインモラルで陰ケ
ンなの、アンダースタンツ!？」

「んだとコラっ!？ テメーだって、ちょっと体温高かったら、目
が痛いからどっか行けとか言うだろうが! テメーはエゴイストで
人類のエリ屑なんだよ!」

エリはブンとむくれて、「ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァー
カ!! ヴァーカ!!」

東京の夜空に、知性の欠片もない子供の暴言が木霊した。

もう一度明記しておく。エリは今年で二十一歳になる。

しかしケンにはそれが効果靦面のようで、必死になって耳を塞い
でいる。

「るっせえっ、このアマ！！ 耳がキンキンすんだろっがっ！！」
耳を聳するほどの風音で、酒顛にはあまり聞こえていない。
けれどもケンには、エリの声がハッキリと聞き取れる。
彼はネコ並みか、それ以上に鋭敏な耳を持っているのである。

「いいから早く行け！！」

業を煮やした酒顛が、彼らをハッチから突き飛ばした。「ぎゃあっ！！」と汚い悲鳴を上げて高度四千メートル付近から落ちていく彼らに、酒顛はまた一つ大きな溜め息をついた。
残るもう一人の隊員が、慰めるようにして彼の肩に手を置く。

「リーダー……」

「ウヌバ。俺、胃潰瘍になりそうだ……」

「すまないリーダー。イカイヨーとは何ダ？」

「……………」

ウヌバは、アフリカ少数民族出身の屈強な、酒顛よりもデカいナリをした男で、日本語は只今激しく勉強中の身である。

酒顛は何も言わず飛び降りた。その目はわずかに潤んでいた。

その理由が分からないまま、ウヌバも後に続いた。

目的地は、東京都内のある総合病院だ。

風速がゆるいお蔭で、落下の軌道が大幅にズラされることはない。たとえ小さな敷地が着地ポイントで、どんな天候でもそこへピンポイントで降りる術があるとしても、これは面倒がなくて好都合だった。

彼らにとって最大の不都合とは、ただ単に思いも寄らぬ場所に降

り立ってしまうことではない。そこで人目についてしまうことなのである。

およそ時速二百キロ前後で落下する中、まだエリはケンに向かって何かを叫んでいる。

彼はそれをうつとうしいので無視することに決めた。

代わりに、ミーティングで話された任務概要を思い出した。

円卓がある部屋の中心に、ホログラム映像が浮かび上がる。四人を模したキャラクターが、輸送機からスカイダイビングしているシミュレーション映像だ。

『目標ポイントは、都内の病院だ。輸送機で上空まで接近し、ダイブする』

ケンはゴーグルのテンブルに触れて、電子マップを起動させた。ひっそりとした深夜の街並みに、道路や建物の名称が表示される。もう一度触れると、真下から少し北へズレた位置に、小さく赤いエリアを確認できた。

目標ポイントの、病院の屋上である。

ハンドシグナル 手信号で隊員達に何やら伝えたケンは、空中でくるりと仰向けになった。さらに両腰に隠れていたレバーを引き出して、先端のボタンを押す。すると、本来パラシュートが収まっているはずのバッグから、地上方向へ大量の空気が吹き出された。

『あとはマップで位置確認しつつ、フロート・バッグ 浮遊機械で屋上に降りる』

フロート・バッグ 浮遊機械とは、彼らが独自に開発した、個人浮遊を可能にする機器のことだ。

小型の特製エンジンが内蔵された箱から、ボックス 圧縮した空気を噴出さ

せることで、空中での上下及び前進運動を実現させた代物である。
左右の動きは腰を捻るなどしなくてはならないが、上手く使えば奇
抜な動きをいくつも可能にする。

それを使いこなす彼らは、反動でひっくり返りそうな胃を抱えな
がら、屋上へと着地した。

「 病院の屋上に降りたら三手に分かれる。俺とウヌバは、
窓側を伝って対象がいる個室付近で待機。エリは屋上から院内の人
間を監視。ケンはペントハウスから侵入し、組織が先に送り込んで
いる諜報員と合流しろ」

ケンを筆頭に、それぞれ打ち合わせ通りに行動する。ケンは諜報
員に開けられたと思われるペントハウスの扉から院内へ忍び込み、
急いで合流地点へ向かった。

「 諜報員？」

「 フリッツくんだ」

「 ちっ、またアイツかよ」

「 フリッツくん、私達の行くとこ行くとこ絶対いるよね」

エリは楽しそうに笑っていた。

「 彼はよくやっている。ハードスケジュールにも拘らず、任務は確
実にこなしてくれる」

酒顔もそんな風にフリッツを褒めていたが、ケンは面倒臭そうに
口を歪めていた。

「 タイムリミット
制限時間は最大十分だ。通常よりもイレギュラーが多いことが予
測される。慎重に、かつ確実に遂行するぞ。キーマンはお前だ、雪
まち

町ケン副隊長。^{サブリーダー}頼んだぞ

』

イレギュラー 一般人との遭遇や、戦時介入。

街中での任務は久々だ。気を抜いた途端に後ろからズドンということは、この国ではないだろうが、隠密に動くに越したことはない。自分達を敵と認識し得るのは、何も一般人だけではないのだから。

「つつても、アイツは…」

回想から頭を起こしたケンの目に、院内の常夜灯に照らされた人影が映った。

その人影は、こちらに気付いた途端に、「おーいつ、ケーンちゃん~~~~ん！」

子供でも知っている院内の禁則事項を、深夜二時過ぎに破り捨てるこの男こそ、組織所属の諜報員 フリッツである。彼は無邪気に両手を振ってケンを呼んでいた。

「ケーンーちゃん、こつちこつぽっ!？」

ケンは飛び蹴りを決めて、彼の暴走を阻止した。

(大声出してんじゃねえよっ、イタリア人!！)

必死に声を殺して怒鳴りつけるも、フリッツは気にも留めず、「いきなり蹴り技とはゴアイサツだなあ、ケンちゃん。ついでに修正しておくよ、僕は生粋のドイツ人だよ」

真面目で厳格な、ドイツ人の鑑だよ。

フリッツは相変わらずニコニコした顔でそう言った。

色白で、見るからにひ弱な男だ。こんな奴が世界各地を飛び回って、実行部隊であるケン達のバックアップを成し得ているのだから、

人間見た目だけで判断できるものではない。

(嘘言うな、お前絶対イタリア人だろっ)

「失礼だな、彼らと一緒にしないでくれよ。僕は彼らが嫌いなんだ…」

急に鋭利な顔つきになった彼に虚を突かれ、「そ、そうなのか…」とケンはいささか辟易した。

「ふう。ところでエリーは？ あの天保山のように慎ましい胸を拝みたかったんだけど」

「そういうところがイタリア人っぽいつつうんだよ！」

「まあまあ、怒鳴らない怒鳴らない。病院では静かにね」

(テメーが言うかつ、テメーがよおっ!?)

気圧された自分が情けない。

今が任務中でなければ八つ裂きにしてやるところだったが、彼はどいうわけか任務中にしか現れないので、ケンのストレスは溜まる一方だった。

「ハハハ、それより時間は大丈夫かい？」

しまった。

ケンはすぐに経過時間を見ようとゴーグルを操作した。が、「ちよっとケン、早く進みなさいよ！ 作戦時間、分かってんの!？」
エリからの通信の方が早かった。

フリッツのせいで、予定を大幅に狂わされている。

エリの役目は、屋上からケンをサポートすることだ。

ケンの能力を考えれば、この程度の任務を一人でこなすことなど造作もないのだが、リスクを無に等しく軽減する為には必要な措置

だった。

彼女は屋上で目を閉じて、あるものを見ている。

彼女は目蓋の裏、もとい研ぎ澄まされた意識の中で、事細かな生体反応を把握している。建物の内部で蠢く動物や、稼動する機械から発される熱。赤外線を精確に知覚キヤッチしているのだ。それは彼女の能力 《サーマル・センサー》によるものである。

彼女は熱量測定器などの機械に頼らず、体一つでそれを可能にしている。

そして他の三人も同様に、それぞれ別の、一般人には成し得ない能力を持っている。

野生動物以上に発達した聴覚と嗅覚を持つケンは、ゴーグルに付属するヘッドフォンの音量を最小にしてから、「案内しろ」とフリッツを歩かせた。

最終目的地は、この下の階にある個室だ。二人は足音一つ鳴らさないように歩いていた。その途中、フリッツは数枚の資料をケンに手渡した。

「対象のカルテのコピーだ。帰ったら清芽先生きよめにでも見せてあげてよ」

急に後ろにあった気配がピタリと止んだので振り返ると、「…おい、フリッツ。こいつはどういう了見だ？」と言って佇む、酷い剣幕のケンがいた。

フリッツにとっては予想通りの反応だった。先に用意しておいたセリフを言おうとした時、エリから通信が入った。

『階段から誰か上がってくる！』

二人はすぐに近くのトイレへ隠れた。

ケンは嫌な臭いに高い鼻を曲げながらも、接近するのが当院の若

いナースだと判別した。微かに香水の香りがして、聞こえる足取りが軽かった。

「早速僕の出番のようだね。任務の方は任せたまよ」

そう言っつて、フリッツは堂々とした面持ちでトイレから出て行つた。

ナースはフリッツを見つけると、声を潜ませて彼を窺めた。

(あつ、フリッツさん！ 夜間の散歩はくれぐれも控えてくださいつつ言っつてるでしょつ)

(OH、スミマセーン。ですがラッキーでース。お蔭でこんなにキュートな妖精ちゃんに出逢いマーシタ)。Danke ありがとう Jesus ジーザス

(もお、ホントに口の軽いドイツ人ねつ)

(男が女スキ。ソレ、万国共通、人類の必然でース！)

フリッツの軽口に、ナースはウフフと頬を染めて笑っている。

患者衣を着ていれば溶け込めるのだろうか。というかそもそも、フリッツは何の病気で入院していることになっているのだろうか。てかやつぱり奴は、イタリア人っぽいのだが…。

フリッツがナースを別の場所へ誘導するのを見計らつて、ケンは無数の疑問を浮かべつつトイレを後にした。

『フリッツ君、相変わらずね。それより、さっき何か言おうとしてたけど…』

エリの通信で思い出した。力が入つて、眉間にも手に持ったカルテにもシワが寄る。

「リーダー、聞こえてるな？」

湧き上がる感情を打ち殺したような声色に、『…何だ』と酒顛は神妙に応答した。

「今回の目標が十代のガキだつてのは聞いてる。ヘレティックの可能性があるから保護するつても、組織としての筋が通っていると思えば納得する余地がある。だけど…」

ケンはズカズカと廊下を歩いて、一つの扉の前に立った。静かに開けて、唇を震わせた。

「だけどなあつ、記憶喪失のガキをパクれとは一言も聞いてねえぞ…っ！！」

『記憶…喪失……！？』

メンバーの顔色が変わった。

彼らにとって、ヘレティックという言葉は特別で、それに属する者達は残らず保護の対象となる。

標的が病院の個室に入院していると聞き、彼らは間違いなく重症患者だと予感していた。

敵に襲われた可能性も考えていた。

子供だというのを知って、保護するのに気が引けてもいた。

しかし、^{アイデンティティ}存在意義を失っている者を相手にしろとは寝耳に水だった。

「おい、こんなガキ連れ帰ってどうする気だ！？ 記憶が無いのを良いことに、マインドコントロールでもやるつってのか！！」

ケンは病室の窓に向かって怒鳴り散らした。

閉じられた窓の外には、酒顛とウヌバの姿がある。彼らは安全帯ハーネスから伸びるロープで、屋上からぶら下がっている。

窓越しの酒顛の口が動き、『任務は絶対だ』とヘッドフォンから響いた。

『我々が背負っているのは、特定された一国家の命運ではない。世界の、全ての未来だ』

それは痛いほど知っている。産まれた時からずっと、身に沁みて味わってきた。

自分に流れる血は、その全てを教えてくれていた。

『我々は、それを背負えるだけの力を持っている。その力を正しく行使して、世界の確実で豊かなる進歩の礎となる。小さな任務でも、その為の歯車の一つだ。どんなに過酷でも、ミスをするわけにはいかない…』

「この呑気に眠ってるガキを持ち帰ることが、世界の為になるのか…!?」

室内に一つだけあるベッドに、十七歳の少年が眠っている。

彼に複雑な顔を向けるケンの様子は、部屋の隅に設置された監視カメラにも見られている。

しかしそれは、フリッツによって事前に画像処理されているので、実際の映像として録画されることはない。

『少なくとも、彼の為にはなる。彼がもし本当に、我々と同じヘレティックであるならば、敵対する何者かに狙われることになる。万一、その力が悪用された時、彼を殺すのは我々だ。俺は、そちらの方が耐えられん…』

大いに有り得るケースだ。

彼らの世界では、ヘレティックの奪い合いは日常茶飯事だ。殺し合いもあれば、家畜のように高値で売買されることだってある。

そうなる前に保護するのが、彼らの仕事の一つだ。

ケン は納得したのか、はたまた己を殺したのか、しびしび窓を開けて、酒顛とウヌバを部屋に入れた。

巨体を揺り動かす彼らの背中を月明かりが照らし、薄暗い病室で眠る少年の上に大きな影を落とした。

「ケン、お前は間違っていない。だが俺達のいる世界では正しい判断ではない。これは、力を持った者の宿命だ」

ギツと齒軋りを立てるケンをよそに、酒顛は廊下に目をやった。

「フリッツくん。良ければキミも、彼の為に祈りを捧げてくれ」

バレたかといった具合に、フリッツが現れた。

先程のナースを、ナースステーションで眠らせてきたらしい。仕事に差し支えない程度に、短時間だけ眠らせる麻酔薬を使ったのだ。

「そういうの苦手だけど、酒顛さんに言われたら断れないねえ」

酒顛達は少年に向かい、またエリは屋上から深く祈った。

「彼の未来に、不滅の光があらんことを…」

* * *

酒顛達は少年を麻酔で、さらに深い眠りへと誘なった。

酒顛は彼を軽々と担ぐと、窓から屋上へ引き返した。心地良さそ

うに眠る彼の寝息が、彼らの良心を酷く揺さぶった。

一同が部屋から出て行くと、フリッツはその窓を閉めてから病室を後にした。

低空飛行の輸送機が無音で近付き、屋上のヘリポートの真上で空中待機する。ハッチから縄梯子が垂らされてきて、酒顛達はそれをよじ登っていった。

侵入時にスカイダイビングしたのは、輸送機が特定のポイントで二度も止まらないようにする為だった。

彼らが少年を連れて峙へ帰っていった後、フリッツは院外の公衆電話から連絡した。

「予定通り、任務成功しました。ええ…ええ……え、今からですか？ いえ、問題ありません。セーフハウス放棄後、すぐに向かいます」

また仕事だ。

また、嫌な仕事が入った。

今度も、胸糞が悪くなる仕事だ。

「……クソつたれ共がっ！！」

フリッツは柔和だった顔を豹変させて、受話器を投げつけた。

弓形の月が浮かぶ、春の暮れのことだった。

「プロローグ」(後書き)

どうもT・Fです。

後書きはフランクにいきましょうか。

今回はとりあえず「プロローグ」を投稿しました。

今後、「一」〜「五」〜「エピローグ」という流れで【第一章】を連載していきます。

正直なところ、書き貯めができていないので、投稿スピードは遅いかと思います。

かてて加えて遅筆というスペシャルな特性。

参ったね、こりゃw

書き貯めができていない理由としては、小説賞への投稿に力を入れすぎたせいですね。

だから次々新しい物を書いて、書き貯めができなかったというわけです。

言い訳ですね。

まあ、それはさて置き、前書きでも述べましたが、せっかくなので可愛がってください。

何分お堅い作風ですが、形にはなっているかと思えます。
細かいところは皆さんにお任せします。

もう自分では分かりませんw

おっと、肝心の「プロローグ」に触れてなかった！
すみません。

作品名の「ネームレスって何?」とか、「で、主人公どいつよ?」
と思われたことでしょう。

それは次回投稿します「二」にて明らかになります。
本当にすみません。

「プロローグ」では、謎の特殊部隊が、記憶喪失の少年を拉致する

という、いかにもありがちな流れになっています。
その目的は？ 少年は何者？ 流れに乗れねえ！
みたいな感じですが、そこはやっぱり「プロローグ」のご愛嬌って
ことで。

あまり長くなってもしょうがないですね。

お疲れ様です、ここまでご覧頂きましてありがとうございます。
それでは次回の投稿まで、さようなら。

P・S・最近寒いので、お身体にはお気をつけください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3165z/>

ネームレス 第一章【記憶の放浪者 -Memories Wanderer-】

2011年12月11日00時59分発行